
観光大使

ににこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

観光大使

【Nコード】

N1696S

【作者名】

ににこ

【あらすじ】

今日からGW！という朝に絵里子は、なんだか若い国王様に幼馴染の宰相の結婚相手として召喚されちゃった！んなもの自国でまかなえ！と思ったが、どうやら宰相さんには自国の人と結婚できない理由があるようで・・・。

そんな理由（前書き）

初めての投稿です。がんばります。

そんな理由

とある世界のとある国、名をムルファナと言う。

その国、ムルファナには若干27歳で稀代の名君と言われる国王がいる。

名前をシャナルナイト・・・周りからは短くシャナと言われる事が多い。

つい最近まで資源の少ないこの国は工芸品の輸出で細々と生計を立てているごく普通の国だった。

しかしシャナが国王となったその翌年から先王の溜め込んだ莫大な資金を元に大規模な国の改革を行い、この国は観光大国へと変貌を遂げた。

特に王都に近い大きな湖のあるアラン地方などは一年中気候も穏やかな保養地として人気急上昇だ。

その改革もある程度軌道にのった頃、シャナはふとある事に気付いてしまった。

現宰相で幼馴染のルナディクト、略してルナは今年29歳。

無我夢中で国政に力を尽くしていたのですっかり忘れていたが、29歳で独身はこちらでは完全に甲斐性なしと言われてしまう年齢。

特にルナはある理由からなかなか結婚相手、ひいては恋人が出来にくい。ルナもそれがわかっているのに、自分から女性を遠ざけている感じもある。

あんなに優秀で、性格も真面目で、容姿も完璧男なのに奥さんがいないなんて、これは可愛そうだと！と思ったシャナは、

「そうだ！お嫁さんと呼ばう！」

と思い立ったそうなの・・・。

幸い？王様にはそれができるくらいの大きな魔力と、陣を形成する知能があった。しかもある程度細かい条件をつけての召還が可能なの・・・。

そして今、杉村絵里子（25）というごく一般的な日本人女性が国王の前に立っているという状況だ。

シャナという人物

「……………んでその話聞いてOK！結婚するよ！って言う訳ないよね？」

ざっくりとした説明を受けた後、その冗談とも言える理由の真意を問うべく絵里子は呆れ顔で相手を見つめる。

「んー、会ってみたら以外に気が合うなんて事もあるんじゃない？」「そういう事じゃなくて！」

そんなくだらない理由で異世界召喚なんてすんじゃない！ってゆうか裏があるんじゃないかとカマかけてんの私は！
なにお茶目な顔して「何が？」みたいな顔作ってんのよ！

「異世界だか召喚だか知らないけど、友達の見合い相手なら自分の国、自分の世界で見繕ってよ」

とりあえず言いたい文句は言って置こう。

こいつに何か言っても駄目そうだけど……。

「んー僕も別に異世界じゃなくてよかったんだけど。たまたま条件にあった人がこの世界に居なかったんじゃないかな？」

フムフムと独り納得顔でうなづくシャナ。

お前も予想外なんかい！！

てゆうか突然召喚されたんだし、こっちも文句言ってるんだから、ちよつとは申し訳なさそうな態度とりなさいよ！

予想外なんでしょ？異世界なんだし？もっと驚いたりないの？
何でそんな普通なんだよ。

「異世界人って信じてない？」

思い立った結論をつぶやけば、シャナはにっこりと素敵な笑顔を向けて

「そんな事ないよ。僕の実力なら異世界からってのも考えられるし、つけた条件がそれなりだからこの国、この世界にはもしかしたらしないかもなーとは思ってたし？」

し？じゃねーよ！まったく。

「んじゃあ条件ってどんなだったのよ？」

そんなにレアな条件をつけたの？異世界まで召喚範囲カバーしてるのなら今度は召喚できたのがあたし1人ってのも納得行かない。

「まっそれはいいじゃない。色々男には秘密ってもんがあるんだよ」
誤魔化しやがった！

「なに！そのいかにも何か隠してます的なニュアンス！」

何か変な条件つけたの？もしかしてかなり恥ずかしくプライベートルな内容の条件だったとか？何か癖とかあったかな？

ああやっぱりあれ？

あのーそのーいわゆる純潔かどうか・・・とか？？

イヤっあたしだって好きで純潔守ってるわけじゃないのよ。高校のときにお付き合いした男の人とチューもしたし、その先だってしてもいいと思ってたけど、その先に行く前に振られたってだけで・

あー思い出したら腹が立ってきた！

あんなに「好きだ好きだ」といっておきながらあっさり「別に好きな子できたから」なんて簡単に振りやがって！

その後からだよあたしが「恋」に消極的になったのは！その結果が

この年になっても処女っていう何となく言うのは恥ずかしい状況に陥ってるんだから！

いやでも25歳で処女・・・・・・・・・・ひーとーりじゃないだらろー???？
他になんだ？あたし何した？

自分のした失態をあれこれ思い浮かべ悶絶していると。

「エリコってコロコロ表情が変わって楽しいよね」
とシャナが可笑しそうにつぶやく。

うっさいわ！楽しいってなんだ！せめて可愛いくらいのお世辞が
言えんのか！

お前は詐欺師顔でいいよな。ポーカーフェイス並みの笑顔。結婚詐欺師とか向いてそうだな！と怨念を込めてシャナを睨めば

「あっ今度は睨まれた」
なんて相変わらず笑っている。

だめだ、打っても響かない。暖簾に腕押し、ぬかに釘
こいつから正常な反応をもらうのは無理なようだ。

質問と交渉（前書き）

お気に入り追加して下さった方ありがとうございます。
あまり長くお待たせする事なく更新できればいいなーと思っております。

質問と交渉

「で、肝心の質問なんだけど」

色々諦め始めたあたしは、とりあえず必要事項を聞くことにした。
シヤナは「ん？」という顔で先を促す。

「百歩譲ってお見合いはまーいいよ。しろと言うならしましょう」
それを聞いても相手は表情を変える事はない。

・・・こいつ嫌だといっても見合いはさせる気だったな。

「んで、もしお互い気が合わなくてお見合い不成立だった場合、あたしは帰れるの？」

異世界召喚ってほら、帰れないのがセオリーだったりするじゃない？
これ一番大事な確認だよね。

「それは大丈夫だよ多分。異世界は想定してなかったからちよつと時間かかるかもだけど、召喚の反対の事すればいいだけだから、きつと大丈夫」

なんだよその”たぶん”とか”きつと”って！
相変わらず心の中のツツコミは忘れない。

が、一部不安はあるものの予想に反してあっさり帰れる宣言が出て
ほっと一安心だ。

帰れないとか言われたら、あたしもそれなりの態度に出なくちゃならない。

しかし！帰れるのならこの寛大な心を持った絵里子さん！許してあげなくてもなくってよ！

「じゃあ10日間！これがタイムリミットこの間に帰れるようにして」

いきなりの日数指定に、当然シャナは「何で？」と聞いてくる。

「あたし一応向こうで仕事を持つてるの。で今日からその仕事が連休で10日間休みなの。だからその休みが終わるまではこっちに居てもいいから、その間に帰れるようにしておいて」

あたしにだって生活がかかっている。ここで無断欠勤で会社を首になつたらたまつたもんじゃない。

「仕事なんてルナと結婚する事になったら必要ないじゃない」

うわっなに？こっちってまだそんな古い考えなの？女は家にいて家事しろって？

嫌だよ。自慢じゃないが家事は苦手だ。何より一日家にいるなんて耐えられない。

てゆうか結婚しないけどね！！

しかし今それを言うと「じゃあ帰れないようにする」とか言われそうだ。

ここはぐっと堪える。

しょうがない仕事理由で帰れないのなら、こっちにするしかない。あたしはすこし悲しげで困った表情を作って訴えてみる。

「ほら、あたしが気に入ってもルナさんが気に入らないかもしれないじゃない？その場合やっぱりこの世界には居づらいし、あたしにだって両親や友達がいるんだから結婚するとなつたら一度挨拶とかしなきゃならないし？どっちにしても一度帰る事を考えて、準備はしてもらっておいた方がいいと思うの」

コンセプトは”強がってても実は不安なんですよ”的な演技のつも

りだがうまく行った？

「んールナの事は心配ないとして、そうだよねエリコの両親も心配するよね？わかったとりあえず帰れるように準備はしておくよ」
よっしゃ！うまくいった！

これで何とか帰り道は確保した！ってことは・・・。て事はだよ！

むふふ、来ちゃたんじやない？絶好のチャンスってヤツが！

なんの？ってそりゃー決まってるでしょ！

あたしの唯一の趣味！これの為に働いているといっても過言ではない。

それは！旅行！！

特に、目的場所だけ決めて後は行き当たりばったりで旅行する”ぶらり1人旅”が大好きなのだ。

本当だったら今頃”GWに行くぶらり信州の旅”に出かけているはずだったのに。

この埋め合わせはしてもらわなくてはならない！

どうせお見合いなんて一日あれば終わるんだし、しかもこんな平凡かつ、女の魅力にかけるあたしが一国の宰相に見初められるわけがない。

万が一向こうが気に入ってもあたしが断ればOKなんだしね。
となったら後の9日間はフリーな訳だ。

しかもここは観光大国だって言うじゃない。これは旅行しないわけがない。

「シャナさん。もうひとつお願いがあるですけど」

さっきまで散々心の中で「お前」だの「あんた」だの「こいつ」呼ばわりだったにもかかわらずこんな時だけしおらしい。

「なに？僕に出来ることなら何でもするよ」

おーさっきの演技の効果がまだ持続しているのか！？何だか優しいだ。

「あたし、もしかしたらこの国に嫁ぐかもしれないんだよね？だったらこの国の事もっと知っておかなきゃいけないじゃない？」

嫁ぐ気なんてないくせに。

「うんそれはそうだね」

「この国って観光業に力入れてるんだよね？」

「ん？うん」

話の方向がわからないのかシャナが一瞬不思議そうな顔をする。

「こっちの事知る為にこの国の観光したいんだけどいいよね？」
勿論費用はそっち持ちで！

「観光？」

思案の表情を浮かべるシャナ。

あつそんな真面目な顔も出来るんだ。

「今は城の外に出るのは・・・んーわかった。いいよ。とりあえずさっき言ったアラン地方の湖畔の街なんてどう？」

「人気の保養地？いいの？やったー！」

リゾートだ、リゾートだ！

思わず笑顔全開で。諸手を上げて喜んでしまった。

そのキラキラした表情を見てシャナはまた可笑しそうにくすくすと笑う。

「早くルナに合わせなきゃ」

そう呟いた声は、今や旅行プランを脳内で練っている絵里子には届いていなかった。

観察を試みたら・・・

最初に居た部屋、いわゆる召喚を行った部屋は、どうやら城の端にある今は使われていない空き部屋だったらしい。

そこから絵里子は「用意した部屋があるから」と言われシャナと一緒に長い廊下を歩いていった。

やっぱり湖畔のリゾートにはワンピースと麦藁帽子か？

テラスでサンドイッチと紅茶でランチして、湖畔を散歩した後シヨッピングなんてのがいいな。

せっかくの異世界に来たのだから何か記念に残るものが欲しい。ピアスとかあるかな？

もうお見合いの事なんてまったく頭がない絵里子は、ものすごく具体的なプランを頭で練っている。

異世界か。やっぱり文化とか違うんだろうな？サンドイッチであるのかな？

ワンピースに麦藁帽子も怪しいか？

ふと気になった絵里子は、一歩前を歩くシャナをとりあえず観察する事にした。

生成りの質感のよさそうなシンプルなシャツに、黒いゆったりとし

たパンツを合わせ、靴は皮のグラディエーターサンダルを履いている。腰には金の刺繍が施されたベルトが巻かれ、そこに剣が釣られていた。

剣は別として、服はいたって普通だ。

男性だから参考にはならないかもしれないが、向こうとこちらで大きな服装の違いはなさそうに思う。

装飾品はピアスはしていないが、深い水色の石の付いた指輪を人差し指に嵌めている。

てことはアクセサリーは存在しているわけだ。もしかしたらピアスもあるかも。

ついでだからシャナの容姿にも触れておこう。

身長は180cmはないだろうが170cm以上は確実にあると言ったところ。

光沢のあるブラウンの髪に、適度に張ったエラのカーブがなんとなくセクシー。

今は後姿で見えないが、先程まで見ていた顔を思い出すと、若干たれ気味のグレーの瞳とすっと通った鼻筋が配置よく並んでいたの思ひ出す。

欧米的な配色と顔立ちではあるが、そこまで彫が深くないところが親しみを感じさせ絵里子にとっては好印象である。

一言で纏めるなら、凄くカッコいいハーフの男性。といった感じだろうか。

「ん？なに？」

あたしの観察する視線に気づいたのかシャナが振り返る。

「何でもない。こっちと向こうの文化の違いがないか考えてただけ」
「何か違うところあった？」

じろじろ見ていたのに気を悪くした様子もなくにこやかに切り返してくる。

見られる事に慣れてるんだらうねこういう人は。

「いや、ほとんど変わらないと思う」

そう観察結果を述べると、なぜかシャナが一度立ち止まってあたしの目の前に立つ。

と、視線を合わせたままゆっくり顔をこちらに近づけ、あたしの耳元に口を寄せる。

「!？」

突然の事に反応できないあたしは、何もできずにシャナの視線を追うことしかできなかった。

フツと感じる吐息に背中がゾクリとする。

そこに追い討ちをかけるように艶のある声が低く囁く。

「中は、見なくていいの？」

「にゃっ!!？」

思わず変な声と共に体をビクツとさせてしまう。

慌てて一步横にずれ、何てことするんだと相手を見れば、意味ありげにニヤリと笑われた。

このアホんだらー!!ドすけべ。ド変体!その顔で、その口調で耳元で囁くな!

お前にこれっぽっちの異性的魅力を感じていなくても照れるだろうが!

お前の裸を想像しちゃうだろうが!!

案の定自分の顔がみるみる赤くなっているのが自分でもわかる。
はずかしい!

こいつのいたずらだとわかっているのに、うまくかわせない自分が
恥ずかしい!

腹立たし紛れにキツとシャナを睨むが、相手は相変わらず楽しそう
に笑っている。

「冗談、冗談、ごめんね」

そう言って何事もなかったかのように正面を向いて歩き出す。

ごめんねで済むか、バカ!!

大声で何か言い返したかったが、気の効いた言葉が思い浮かばずイ
ライラしていると、シャナの背中がどんどん遠ざかってしまう。
しょうがないので、とりあえず復讐は跡で考える事にして、今はそ
の背中を追いかける事にした。

観察をしてみたら・・・（後書き）

なかなか本命が出てきません。

もう少しお付き合い下さいませ。

誤字・脱字だらけだったので直しました。すみません。

侍女との対面（前書き）

おまたせして申し訳ありませんでした。

侍女との対面

案内された部屋は予想通り”そりゃ王宮だもんね”と言わせるほど豪華な部屋だった。

洋風ともアラブ風とも言えるその内装は一つ一つが丁寧な作りで上品にまとまっている。

ベッドには当然のように天蓋がついていて姫様仕様だ。

違う歴史を刻んできても、文化とは同じように発展するのかと思うと不思議な感じがするものだ。

でも、だとしたらこちらの世界にも和風に発展した国があってもおかしくない。

そして、それならばそんな和風の国に召喚されたかったと思ってしまうのは、きっとこの両脇に立つ二人の女性のせいだろう。

絵里子は今鏡を前にして座っている。

そしてその両脇、向かって右側に濃緑の髪を肩まで伸ばし翡翠のよな鮮やかな瞳を持った、にこっと可愛らしい美少女。

左側に、濃青の髪をきつちりと結び上げ、猫のようなヘーゼル色の瞳をしたキリっとした正統派美人。

どちらも目鼻立ちのはっきりした洋風のどえらい美人だ。

それはもう髪の色 of 珍しさなんてなんとも思わない程に美人なのだ。

その二人に挟まれて座る自分。

誰も間違え事のないだろうアジア顔の自分は比較対照があるから余計に地味に映る。

女性としての格の違いを見せ付けられ、小さくため息を付いたところで左側の濃青の髪美人に話しかけられた。

「エリコ様、今日からお世話させていただくモリアスと申します。こちらはエリンどうぞよろしくお願いいたします」

優雅に腰を折る二人のその仕種は”金持ちの家の侍女”そのものである。

シヤナ同様の生成り色のブラウスにスカートのセットアップ、茶色の前掛けがよく似合い、よりいっそう侍女感を増長させていて素敵だ。

「こちらこそよろしく申し上げます」

鏡越しに挨拶をするのが憚られるその高貴さに慌てて立ち上がって挨拶をする絵里子。

その庶民丸出しの行動にも表情も変えず、やさしく微笑む彼女達はやはりプロだ。

そして更に「私達はエリコ様の侍女ですので気にしないで下さい」なんて厭味なく言われてしまえば、もうここは高級ホテルに懸賞で当たったと考えるしかないと思う絵里子だった。

改めて座りなおすと、早速両脇の二人と今夜の服装について相談が始める。

「エリコ様ドレスのご希望はございますか？」
やっぱり夜会にはドレスなのか。

当然ドレスなど着たことがない絵里子には希望などあるわけがない。

「特にありません。適当にお願いします」

「そうですか。ではこちらで何着か選びますのでその中から選んでいただけますか？」

「はい」と答えると、二人はいそいそと奥のクローゼットへと服を取りに向かった。

程なくして数着のドレスを持った二人が戻ってくる。

よかった、こちらでのドレスも向こうのものと大差がない。

という事は湖畔でワンピースも夢ではないという事だ。

まーその前に、モリアスとエリンが2ピースと言えども

スカートを履いている時点でワンピースの存在を疑ってはいなかったのだが。

「どれもエリコ様の髪の色が映える色とデザインだと思うのですが」
そう言って広げられたドレスが全部で5着。

どれもシンプルなデザインで「こんなの着れない」と叫ぶようなものはなかった。

しかし、それよりも気になったのが「髪の色が映える」という言い方。

引き立たせるのは顔であって、髪じゃない気がするのだが、こちらでは髪の色を重視しているのだろうか？

世界には「首が長いと美人」とか「耳たぶが垂れ下がっているのが美人」とか美の条件というのは多様にある。

そういった流れかと思いきや聞いたのだが、この部屋に案内したと同時に「仕事があるから」と言って去っていった何とも自分勝

手な国王様が「エリコは僕の遠い親戚です」

と言っていた事を思い出し、下手な質問は出来ないと思い留まる。

仕方がないので、何も言わず薄い萌黄色のドレスを選ぶと

「そうですね、これならエリコ様の可愛らしさも引き立ちましょう」とモリアスがお世辞を言ってくれた。

侍女との対面（後書き）

あまり内容進まず申し訳ない。

夜会へと

たっぷり時間をかけて完成された夜会用の衣装とメイクは、絵里子いわく平凡と称されるその容姿を何倍も美しくみせていた。その変身ぷりやいなや絵里子自身が驚くほどの完成度だ。

元々絵里子は自分で言うほど駄目な容姿をしているわけではない。きつと過去の恋愛事情から、過度に自己評価が低くなっているだけなのだ。

決して美人ではないが、黒に近いこげ茶のつぶらな瞳と片えくぼが小動物を思わせ、庇護欲、嗜虐心をそそる可愛らしい容姿をしていた。

その可愛いらしさと、薄い萌黄色のドレスはとてもよく合っていて、侍女達が言うように最近染めたばかりのアーモンド色の髪ともよく合う。

軽く後れ毛を残し、アップにされた髪には白い花の髪留めが使われ、深い青をした石の上品なネックレスは少し大人っぽさのアクセントになっている。

ピアスは存在していないようで、はめっ放しになっていたリング状のシルバーピアスを見たエリンにどういう構造で耳についているのかを聞かれ耳に穴を開けて刺していると話すと、さも痛そうな顔をして自分の耳をさすっていた。

残念ながらお土産にピアスの計画はなくなったようだ。

しかし、ピアスは買えなくなってしまったが、変わりにこの指輪がいいかもしれない。

絵里子は左手の中指にはめられたその指輪をしげしげと見つめ思う。

3?程の幅に物凄く細かく透かし彫りの施されたその指輪は、日本の城などでよく見る欄窓のような繊細さで美しく細工されている。どんな金属を使っているのか色は一見銅のようだがもう少し光沢があり、これほど薄く加工されているのに変形することなく硬い。

思わず「これとても素敵ですね」と最終チェックをしてくれているモリアスに話しかければ、とても嬉しそうに「父が作ったんです」と微笑む。

「お父様が？」

「はい、父はこのトフラ細工の職人なんです。最近では観光業が有名になってしまいトフラ細工の職人をやめる人も多いようですが、父は今でも現役で作っているんです。私が王宮で働けたのも父が王族御用達のトフラ細工の職人だった事もあるんですよ」

そう言うモリアスさんはどこか誇らしげで、お父さんの事を尊敬しているのがよくわかる。

「素敵なお父様ですね」

うらやましく思いそう言うと、モリアスさんは「はい」と満面の笑みで頷いた。

その笑顔は美人のモリアスさんが可愛らしく観えてしまうほど素敵な笑顔だった。

トフラ細工って言うのか・・・職人さん減ってるって言ってたけど残念だなあ。

伝統工芸は保護していかなければならない大事な遺産だと思うんだけど、そういうのこの国どうなってるんだろう？

観光業が盛んなら効果的に伝統工芸品とか売り込めてればいいんだけど。

旅行が趣味の絵里子は国内は元より、海外でも失われつつ伝統を数多く見てきた。よりよく発展するために変化は必要だと思うのだが、

目先の利益で道を誤る事が多々あるように思う。

旅先で、その土地の伝統や文化に触れたいと思っている絵里子にとってはそれはとても残念な事なのだ。

後でシャナに聞いてみよう。

少し真面目な思考に陥ってしまったが、モスリンさんの「出来ましたよ」の声に我に返る。

夜会まで少し時間の空いた三人は、先程の会話で一気に距離が縮まり、その空いた時間をお茶を飲みながら楽しいおしゃべりで埋めていた。

その話の流れで絵里子が今日はルナディクトさんとお見合いを勧められてここに来たことを告げる。

「どんな人？」と質問すると二人とも驚き、そして戸惑いの表情を一瞬浮かべた。

しかしそれは直ぐに隠され、笑顔を作ると

「とても素敵な方ですよ。剣と魔法の腕も立ちますし、博学でいらつしやるし、すこし無愛想な感じもありますけど心根はとても優しくいつも使用人の事を気にかけて下さいます」と絶賛する。

「でもそんなに素敵な人だったらなんで結婚できないんだろうね？」

至極当然の疑問だと思うのだが

「それは・・・」

と二人とも顔を見合わせてその後の言葉を言いよどむ。

「・・・・・・」

なに？その間。

なんだか会うのが怖くなってしまった絵里子だが、丁度その時

コンコン

とドアがノックされる。

絵里子が「はい」と返事をする。とドアが開き、シャナが姿を見せる。

侍女二人は立ち上がり、シャナに礼をとる。

ドレスアップした絵里子と顔を合わせたシャナは相変わらずの様子で、絵里子を褒める。

「エリコとっても綺麗だよ。これならルナもイチコロだね」

「お褒めいただきありがとうございます」

イチコロってなんだよ！と思いつつもとりあえず褒めてもらった御礼をした。

「僕もちよつとよろめきそうなくらいだ」

額に手をあて、眩暈を起こしたジェスチャーをとる。

はいはい、思ってもない事言わなくてよろしい。

まだ何か言葉を発しようとするシャナに、このままずっと空々しいお世辞を言われるのはたまらないと、絵里子は、正装と思われるその騎士のような服装をしたシャナに「シャナもとってもよく似合っている」と賛辞を送った。

「ありがとう。僕はこの畏まった服が嫌いなんだけど、エリコが褒めてくれるのなら、これを着るのも悪くないと思えるね」
そう、楽しげに流し目で微笑む。

だから本当に、どこのホストだお前は。

心の中で毒づく絵里子を知ってか知らずか
「そろそろ時間なんだ。準備は大丈夫？」

と絵里子ではなく二人の侍女に向けシャナが問いかける。

「はい、整ってございます」

モリアスが簡潔に答えると

「ん。じゃあエリコ行こうか」

そう言って外へ促された。

後ろか付いてくる様子のない侍女二人に絵里子は急に不安になった。
先程の二人の話も気になるし。

しかし見合いを言ったのは自分だったし、終わってしまえば
後は自由だと思い直し気合を入れる。

「よし！行こう」

そう言って差し出されたシャナの腕をとり、会場に向かうべく部屋
を出て行った。

夜会へと（後書き）

やっと登場させられる・・・。

出会うとき 前編（前書き）

な、長い？

出会うとき 前編

目的の場所に近づくにつれ、華やかな音楽と人のざわめきが大きくなる。

その音に絵里子の緊張は更に高まった。

思わずシャナの腕に添えてあった手に力が入る。

「エリコそんなに緊張しなくて大丈夫だよ」

苦笑交じりのシャナの声に絵里子は苛立つ。

あんたは緊張しないかもしれないけどあたしは慣れてないの！

それに今日はいつもはいないシャナのSPと思われる騎士が3人も背後に張り付いているのだ。

その物々しさがまた、絵里子を緊張させる要因になっている。

「なんで今日はお付がいるのよ」

質問というよりは文句のようなそれにシャナは苦笑する。

「一応形式ってやつ？やっぱり夜会の会場に1人でヒョコヒョコ現れたら威厳ってもんがないでしょ？だから」

納得といえば納得の答えだ。しかし、

「シャナに威厳なんてあったの？」

ふんつとちよつと厭味っぽく言ってやったがそれに怒るでもなく、やっぱりシャナは笑っている。

「ふふふ、実はあったんだよ。これでも稀代の名君ですからおどけて言うその姿からは威厳は感じられないのだが。」

「稀代の名君ねえ」

どうだか。といった調子で呟けは

「あー信じてないでしょ」

と口を尖らせる。

「幼馴染の嫁を召喚で呼び出そうって発想するようなヤツを名君とは思えない」

「そういう突拍子もない思い付きが好評なんだけど？」
自慢げなその物言い。

「まー確かにいろんな可能性、いろんな角度から物事を見ることが出来る人は仕事のできる人だとは言うけどねえ」
巻き込まれた方はたまったもんじゃない。

くだらない話をしていたらいつの間にか少し緊張がとけた。
そして目の前には大きな扉。

扉の前にはドアマンならぬドア騎士がいる。
ドア騎士は此方に気づくと、否応なくその扉を開くのだった。

シャナが会場に入ると視線が一気に此方に向く。
物凄い人数のそれに絵里子は思わずたじろぐが、シャナが「大丈夫」と添えていたあたしの手に自分の手を添えて落ち着かせてくれる。
あっちょつとそれきゅんと来る。

その後大勢の人がシャナに挨拶をしにくる。
1人が終わるとまた1人。
一歩歩けばまた1人。

こんな調子の挨拶にシャナは飽きもせず同じ台詞を繰り返す。

「此方は僕の遠い親戚でエリコ。少し僕の仕事を手伝ってもらおう
と思って急遽来てもらう事になったんだ。なにぶん僕と同じで庶民
出だからあんまり厳しくしないでやってね」

そう言ってあたしに「さあ」と挨拶をするように促す。

「絵里子と申します。よろしくお願いいたします」

と皆のまねをして腰を折る。

すると挨拶した側は、自分の名前と挨拶、そして決まったように「すばらしい髪色ですね」という言葉を送られる。

やはりこちらでは髪は大事なポイントらしい。

よくある”黒髪神秘論”か？と思ったが残念ながら絵里子の髪は今染められている。

茶色がいいのだろうか？シャナも茶色だし・・・。

絵里子にとっては皆の緑、黄、青、赤なんていう奇抜な髪色の方がびっくりなのだが・・・。

それともう一つ気になる事が。

それは、シャナの「僕と同じ庶民」発言だ。

王族といえば当然世襲制と思っていたのだが、違うのか？

”隠し子”とかなのだろうか？

そもそも王族と庶民以外に貴族とかが存在しているのかも不明だしなあ。

どういう仕組みになっているのだろう。

そう考えてフツと笑いがこみ上げる。

よくこんな情報不足の深夜会に参加したよなあ

と自分で自分に感心しながら心の中で苦笑する。

あらかた挨拶が終わると早速疑問を解決すべくシャナに質問をぶつけた。

「同じ庶民ってどういう意味？王様って世襲制じゃないの？」

隠し子とかだった場合、不躰な質問ではあったが、それに怒るよう

な相手ではない事はこの短い間でもわかっている。

「基本は世襲制だよ。ただどうしても王が国を荒らす場合”篡奪”もありうる」

そう言っただけでニヤリとするシャナ。

篡奪の意味はわからなかったが、何となくその顔から良いイメージは受けない。

「……さ……篡奪ってなに？」

聞いてはいけない気もしたが、恐る恐る口に出す。

「んー簡単に言うと、王様殺して奪い取ったって事」
「!!？」

殺したという直接的な単語に絵里子は絶句する。

シャナは笑顔に少し影を落として言葉を続ける。

「色々ダメな王様だったからね……」

その先も何か話そうと「うち……」とまでは声に出したのだが、そこでシャナは言葉を止める。

そして何かを振り払うように笑顔を作ると

「ほら、今の方がうまくいってるし？」

とおどけて言う。

「う……うん」

何か言わなきゃいけないとは思ったのだが、かける言葉が見つからない。

なので絵里子は違う話をふる事でこの雰囲気を変えようとした。

「あっあのじゃあ髪の色って何か重要な意味があるの？」

もう一つの疑問を思い出し口にする。

その質問にシャナは先程とは違う満足そうな笑みを浮かべる。

絵里子はそれをみてほっとした。

どうやら雰囲気を変えることに成功したようだ。

「髪の色はね……」

そうシャナがしゃべり始めた所で会場がザワツと揺らいだ。

出会うとき 後編

皆が見ている方向を目で追う。

すると、なんだかとても目立つ容姿をした人が真っ直ぐこちらに向かってくるではないか。

この人もシャナに挨拶に来たのだろうか？

絵里子は皆の注目度から、有名な人物、もしくは位の高い人物だと勝手に想像し少し身構える。

しかし、それにしても・・・。

絵里子はその人物を悪いと思いながらもじっくり観察しよう。

驚く程の美形だと言うこともそうだろう。背が高いという事もあるだろう。

——しかし何より先に目が行くのはその髪の色。

それは、とても綺麗な桜色。

満開の桜を思わせるその白を多く混ぜた淡いピンクは、珊瑚色とも言える素敵な色をしている。

そしてその人物が男性で、髪の色 of 可愛らしさに似合わず無表情である事もまたミスマッチでいい。

ゲームの萌えキャラみたいだ。

ムルファナ国の宰相、ルナディクト29歳 男

その人物に対しての絵里子の第一印象はそれだった。

「シャナルナイト様、何の御用でしょうか？」

一応シャナに礼の形はとりながらも、すぐく不機嫌さが伺える声。

「何って宰相なんだから夜会には参加するのは普通じゃない？」

それに対し、相手はシャナをムツとした感じで睨むと

「緊急だと言われたのでまいりましたが、用がないのでしたら戻らせていただきます」

そう言ってさっさとその場を立ち去ろうとしてしまう。

その背中にシャナは言葉を続ける。

「ルナ、夜会とか嫌いなのは解ってるけどさ。もう大人なんだし、そう我儘も言ってもらえないよ。仮にも宰相なんだし」

どっちが年上だかわからないその説教じみた発言に、相手も負けじと言い返す。

「宰相を引き受ける時に人前に入る事は絶対しない。とお約束してください。さっさと返すです？」

立ち止まり振返るルナ。

「ルナだって僕が国王になっても態度を変えないって約束したじゃない」

ルナはまずい所を突かれたのか不機嫌な顔を更に歪める。

「公の場ですの」

しょうがないでしょう。というその言い訳に、シャナは間髪いれずに言い返す。

「いつも”公の場””他に人がいるから”とか言っつとそんな感じだけど？」

「……」

言い返せないらしいルナは、何秒か考えた末、諦めた表情で、

「では少しだけ」

と本当に不服そうに呟いた。

この人があたしのお見合い相手か。

絵里子は改めてその人物を見やる。

桜色の髪に水色の瞳。定規で測ったようなベストバランスで配置された顔のパーツはシャナの上を行っている。体つきも筋肉質で、夜会場にはふさわしくない普段着がよりいっそうそれを強調していた。

これで笑顔でも振りまいたら最強ではないかと思うその人物は、何がそんなに嫌なのか相変わらぬ不機嫌顔で近くのグラスを手にする。

仕方ないしにグラスに口をつけるその姿に絵里子は笑ってしまった。

美形が嫌がる姿ってなんとなく好きだ。

なんて、声に出したらあらぬ誤解を受けそうなその発言を心の中で留めたところで、シャナの手が絵里子の背中を押す。

「じゃあルナ、エリコのエスコートよろしく」

そういつて、絵里子の腕をとって強引にルナの腕に絡ませる。

「!!」

「ちょ、ちよつと!!」

さすがの急な展開に絵里子も声を上げた。

どうやらルナは固まっているようだ。

”じゃあ後は若い二人で”って展開は早すぎでしょうが!

まだ会って挨拶も交わしていない。

絵里子は慌ててシャナを引きとめようと腕を伸ばすが、既にシャナは手の届かない距離にいた。

確信犯か!

「またちよつとしたら戻ってくるから」

そう笑顔で手を振ると、シャナはさつさと会場から姿を消してしま
ったのだった。

NGワード

気まずい沈黙が流れていた。

とりあえず絵里子は無理やり絡まされた腕を外し、近づきすぎた距離を一步はなれた。

相手はこちらを見下ろしたまま何も言わない。

どうしろと・・・。

こういう場合って普通男の人が気を使って話しかけたりしてくれるんじゃないの？

それともイケメンは何もしなくても女が寄ってくるからそんなスキルいらなくとか!？

ふざけんなよ! 言っておくけどあたしは、外見よりも中身重視だからね!!

そんな事を心の中で叫んでも、沈黙と周りの視線の痛さは変わらない。

と、とりあえずここは自己紹介からかな・・・。

「えっと・・・絵里子といいます。はじめまして」

軽く膝を折り札の形をとる。

それでも何も言わない相手・・・。

よく見れば、ルナさんは、こちらを凝視したまま動いていない。

「ルナディクトさん？」

絵里子は何かあったのかと不思議に思い、首をかしげて相手を見上げる。

ルナの目の前でひらひらと手を動かす。

生きてる？

一拍あってから、はっとした様子で相手は視線を逸らすと「すまない」と一言。

そしてまた沈黙。

すまないと思うんならなんか喋れよ!!

とりあえず、生きているなら何か話のきっかけをと絵里子は話題を模索する。

何がいいだろう。

ああそう言えば・・・。

「ルナさんは夜会は嫌いなんですか？」

先程の嫌がりようを思い出し絵里子は少しニヤついてしまった。

しかし、そのほくそ笑みに水差すように相手は「当然だ」と短く言い捨てる。

”そんな事もわからないのか？馬鹿か？”とその全身で相手は語っていたが、ここでムツとしたら話は進まない。

ただで旅行を手に入れるのに、お見合い開始1分で終了させては心苦しい。

あたしって律儀だな。

「とっ当然なんですか？」

方頬をひくつかせながらも絵里子は話を続ける。

絵里子自身はお偉いさん方の長く固い挨拶がないのなら、こういったパーティーも悪くないと思っている。

まっそれは当然他に友達が居て、お見合いだなんてイベントが待っていない場合なのだが。

「人が多いところが嫌いなんですか？私も苦手です。特に混んでいる街中を歩くのとかが苦手です」

「・・・・・・」

「それにしても美味しそうな料理ですね」

何も言わない相手に、話題を変えればいいのか？と今度は料理について話してみる。

目の前に広がる色とりどりの料理。

実は、さっきから挨拶ばかりで一つも食べられていない。おながが空いているのも事実。

「これって勝手に食べていいんですか？」

ルナに聞けば、なんだか少し戸惑っている様子で「ああ」と答える。本当に無愛想な人だなあ。

だから顔がよくても彼女が出来ないんじゃないだろうか？

「どれかお勧めの料理ってありますか？」

種類も多くて迷うのもそうだが、なにせ異世界料理、何が何だかわからない。

「………私が取ろう」

そう言うのと近くにあった小皿にルナが適当に料理を盛ってくれる。

おっ、以外にいい所あるじゃない。

これで料理の感想や、これどんな食材なのかとかで少しは話題をつなげる。

ホッとしながら絵里子は料理を取ってくれているその間、なんとなく気になるその髪の毛をこっそり眺めた。

根元から綺麗にピンク色だ。

パサパサに痛んでる様子もないし、染めてるわけじゃなさそうだ。

魔法で髪は染められるんだろうか？

だったら人前に出るのが嫌いなルナさんがわざわざピンクにしている訳はないか……。

それにしてもやっぱり綺麗な色だ。それに似合っている。

心底そう思ったのだろう、今度は勝手にそれを声に出していた。

「髪、素敵な色ですよ」

料理を取っているその背中に声をかける。

「は？」

と不振げな声と共に相手が振返る。

「ん？？髪、素敵なお色ですね」

絵里子は聞こえなかったのかともう一度、その桜色の髪を見つめながら同じ言葉を繰り返すと、相手は何を言われたのか解らないといったように、呆然としている。

「？」

何だろう？自分も他の人に髪を褒めてもらったので自分も相手の髪を褒めただけのつもりなのだが。

何か間違ったのか？

絵里子はあせる。

なぜなら、目の前の人物から放たれる冷気が尋常ではなく、更に周りで聞き耳を立てていたギャラリーがざわざわとしだしたからだ。

「本気で言っているのか？」

急に怖い声でこちらを睨らむルナに絵里子は顔を引きつらせる。

美形は怒ると怖い。

「な、なんで怒ってるんですか？」

さっきまでちよつといい方向に進んでいたのに、髪の色を褒めただけで急にマイナス方向に針が振れた。

なんで褒めたのに怒られてんの？

そう思った瞬間に焦りとは別に、理不尽な対応に怒りも湧く。

「・・・」

「・・・」

数秒の睨み合いが続く。

変な所で意地っ張りな絵里子は、自分は”絶対にあたしは悪くない！”とルナを見据えたまま目を離さない。

長いようで短い攻防の末、先に折れたのはルナの方。
持っていた皿を絵里子に押し付けると

「もういい」と一言。

何がもういいのかさっぱりわからない。

勝手に怒って、勝手に諦めて……。

釈然としないが、それでも相手からの冷気がなくなった事に絵里子はホッとする。

こういう雰囲気は苦手だ。

それならばこの話題は禁句なのだと誰でもわかるのだが、バカなのか絵里子はいったいこんな事を聞いてしまう。

「さっきシャナにも聞きそびれたんですけど、髪の色って何か意味があるんですか？」

宇宙人でも見るような奇怪な眼を向けられる。

実際絵里子は宇宙人みたいな存在なのだが。

「本当に何も知らないのか？　というかお前は誰だ？　今更それですか？」

「あたしは、シャナの遠い親戚って事になってますけど？」

これにもまた難しい顔をするルナ。

確かに幼馴染の彼にとって、こんな親戚いたかな？　と考えるのは当然だろう。

「そうだったのはつい何時間か前なんですけどね」

悪戯っぽく絵里子は笑う。

「どういう事だ」

混乱するルナ。

「んーあたしの口からは何とも言えないので、後でシャナに聞いて下さい」

”あなたの嫁候補で異世界から呼ばれました”

なんて電波ナ事あたしにはこの会場で言う勇氣はない。

「で、教えてくれるんですか？」

思案顔のルナに絵里子はもう一度問いかける。

一瞬迷った顔を見せたルナだったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「本当に髪の色について知らないのか」

「はい、まったく」

即答に、ルナも、聞き耳を立てている周りのギャラリーも息を呑む。

「記憶喪失か？」

いぶかしむルナの思い至った結論はそれだったらしい。

だったらここはその話に乗っておくか。

「そんな所です」

ルナは大きいため息を一つ吐くと、仕方ないといった様子で話はじめる。

常識とは

「世界には5色の色がある」

そんな口調でルナが話し始める。

「空の青、新緑の緑、火の赤、太陽の黄色、大地の茶色、で5色だ」
絵里子は首をかしげる。

なんとなく言いたいことは分かるが、それ以外の色も実際目の前にあるし、光の三原色を知っている絵里子にとってそれは笑い話だ。

「勿論今は研究が進みそれ以外の色も作り出す事ができるが、古代神話ではこの5色が世界の色だ」

あー神話ね。神話って結構無理があるもんだよね。ふむふむ。

「だから人もこの5色の髪を持って生まれるのが普通だ」

そう言われ、絵里子は周りを見渡す。

確かにルナが言う通り、濃淡の差はあるがその5色の髪の色ばかりだ。

どうせ神話なんて後付けなのだ、神話ありきの髪の色ではない。

髪の色ありきの話なのだ。

「私のこの髪は異端だ」

そう言ってルナは自分の髪を引っ張る。

「この世界にこんな色は存在しない。だから嫌われる」

「・・・」

続きの言葉を待っていると、そのままこれで終わりだとばかりに口を閉じるルナに、絵里子は激しくつつこむ。

「え？それだけ！？」

もっと何かすっごい理由があると思ったのに、ありえない髪の色だからってだけ？？

せめて呪いを受けた色だとか、病気だとか、珍しい民族の生き残りの証だとか・・・ないの？

きょうび、そのありえない色にわざわざ染める人が多く暮らす世界で育った絵里子にとって、その理由はあまりにもあっけない。

というか、茶色以外の4色でも絵里子にとっては十分不思議なので、ルナのピンクがどれ程異端なのかが、ピンとこないのだ。

確かに、よく考えてみれば、人間は自分達と違うものを排除しようという傾向がある。もしルナが向こうの世界で産まれていたとしても人生は大変なものになるだろう。

就職とか出来なさそうだよね……。

絵里子はピンクの髪でスーツを着て、真面目な顔して営業周りをしているルナを思い浮かべて、顔を緩める。

契約取れないだろうな……むふ。

いつその事警官とか？交番にピンクの髪のお巡りさんがいたら人気者になりそうじゃない？イケメンだし。

ん？嫌、待て、そうかイケメンなんだから、モデルとかでいいんだ。ピンクの髪が話題になり注目度は抜群。本人に相当才能がないわけじゃない限り食っていけそうだ。

何だやっぱりピンクの髪はたいした障害じゃないじゃん。日本じゃなければもっと髪の色に寛容だろうし、先天性なら尚の事問題ない。むしろそれは武器になりうる。だからやっぱり最初の「それだけ？」の反応は間違っていなかったのだ。

万能だなイケメン！

話がずれた事に気づかず、絵里子はひとり納得してうなずいている。

隣でその百面相をみていたルナは何とも言えない気分になっていた。

最初に見たときは見事な焦げ茶の髪に眼を奪われた。

なまじ、自分の髪にコンプレックスがある為、人の髪の色には敏感だ。

顔を見ればまだ幼い少女のようだったが、体つきは大人の女性のものである。

そのアンバランスな感じに、なんとなく背徳感が煽られドキっとした。

しゃべり始めても理性的なしゃべり方で、やはり大人の女性なんだと確信した。

と同時にニヤリとした笑みとともに「夜会が嫌いなのか」と嫌味を言われたので、ムカツと来た。

つい冷たい態度をとってしまう。

その後も変な言動が続いた。

だが、話が進むにつれて、相手が嫌味や貶めの為に言っているのではない事だけは伝わってきた。

ただの変人か？

と思ったら、どうやら記憶喪失らしい。

記憶喪失とはこんな常識中の常識も忘れてしまうものなのだろうか？

異端の色だと説明してやると「え？それだけ？」と言われた。

それだけ？

・・・それだけか。

この色は自然界には存在しない。ただ何百年も前に有名な画家が書いた絵にはこの色が使われている。

この世の歪に住む悪魔を具現化した絵だった。そして、その悪魔の

頭髮にこの色が使われている。

しかもこの色素はある動物の死骸から精製される。

なんていう付加価値はあるのだが、言ってしまうは”色が変”というただそれだけの事だ。

そうか”5色の色ではなければ人間ではない”という常識がなければこの髪の色もただ他人と違う”それだけの事”なのか。

計画の変更

絵里子はモグモグと渡された料理を口に運ぶ。

反射的とはいえ「それだけ？」発言をしてしまい、やばいかと思っただがなぜかルナの態度が柔らかくなった。

お皿に乗った料理がなくなりそうになると「あれも美味しいぞ」「これもいい」「甘いものは好きか？」などと世話を焼いてくれる。きっと記憶喪失という事で気を使ってくれているのだろう。

お腹が空いていた絵里子は、ありがたく思いながら紹介された料理を次々と口に運んだ。

ただなんとなく、周りの視線がルナとやりあっていた時より奇妙な物を見るような眼に変わったと思うのは気のせいか……。

お腹も満たされ幸せ気分でルナと食後の珈琲もどき（トトラと言うらしい）を飲んでいると、背後から声がかかる。

「やあエリコ、ルナはちゃんとエスコートできている？」

すべての元凶とも言えるその男が帰ってきたようだ。

絵里子の横に立つと、さりげなく腕を絵里子の腰に回す。

さすがにそれは馴れ馴れしいと文句を言おうとするが、それより早くルナがシャナの腕をたたき落とす。

「触るな」

幾分怒気をはらんだその口調に絵里子は驚きながらもナイスと賛辞を送り、シャナは笑みを深める。

しょうがないと言った様子で腕を下ろすシャナ。

しかしその直ぐ後に絵里子の耳元に口を寄せ「うまく行ったみたいだね」とこそつと囁く。

絵里子はビクツとし、ルナは鬼の形相で怒鳴る。

「近い！」

同意です！！

ルナは絵里子とシャナの間に分け入り二人の距離をとる。

それをシャナは見つめ、絵里子に視線を送りニヤつとする。

いやいやさつきから何となく意味ありげな事言ったり、視線を送ったりしてるけど、別に何もないからね。

ちよつとした行き違いがあつて、かわいそうな女のオプションで氣を使つてもらつてるだけだからね。

「あつそうそうルナ。エリコがアランに行つて見たいらしいから、視察のついでに案内してやつてよ」

シャナがそう言うのと、ルナが方眉を上げ「アランに？」と呟く。

絵里子は絵里子で、案内役は是非にも女性に思っていたし、これ以上ルナに関わるのも得策ではないと思つていたので、慌てて口を挟む。

「いや、いいですよルナさん。お忙しいでしょうし……。シャナ、できれば……」

「わかった。案内しよう」

できれば、モリアスさんかエリンさん、どちらかを一緒に連れていかせて下さい。とお願ひしようとしたのだが、言い終わる前にルナが返事をしてしまう。

まっ、待って！

「うん。よろしくね」

シャナがニコつとルナに微笑み、商談が成立してしまったようだ。だから待てと言っているだろう！

「る、ルナさんいいんですか？お仕事とか大丈夫なんですか？いいですよ、あたし湖畔でボーとしたいだけなんで案内とかなくても平気ですし、誰か女の人でも1人くらい付けてくれればそれで十分・・・」

「いや、女性だけの旅など危ないです。エリコさんの記憶の事もありますし……。それにアランはとてもいい所ですけど最近少々問題があつて、私もちよつと視察に行かなくていけない所だったんで

すよ」

「で、でも・・・」

「いいじゃない、ルナもこう言ってるんだし、もちろんルナの他にも何人か護衛と侍女もつけるし、僕もそっちの方に用事があるから、ずっとじゃないけど一緒に行くよ」

お前も来るのかよ・・・。

これでは、当初の計画が台無しだ。

本当なら、今日お見合いして、2、3日相手の出方を見て、何も言っておかなかった、もしくはナイとは思いますが、もう少しお付き合いを、という返事だったなら申し訳ないが、こちらからお断りの返事をし、魔方阵が出来るまで、城にいと気まずいからと旅行に行かせてもらい、完成したら日本へ帰る。という詳細な計画が立っていたのだ。

それなのに、というか、うすうす気づいていたが、今日のこのお見合い、ルナさんはまったく知らされていないよね!?

なんせこの会場に来る気さえなかったんだし?

という事は、まず向こうから断ってくるという事がない。

あたしがもし今断っても「まだ日にちはあるんだしもう少し一緒にいてみてよ」とシャナは言うに決まってる・・・。

絶対にこれシャナは最初からわかってたよね?

あたしが旅行に行かせろって言ったとき、最初は渋ってたけど急に態度変えていいよって言ったのは、これを思いついたからだよね?

———ものすごく嵌められた感があるが、今更しようがない。

とりあえず最終的には10日後に帰ればいいのだ、多少の計画変更はやむをえない。

「じゃあ明日準備をして明後日出発でいいかな?」

シヤナがそう二人を見て言う。

「いいだろう」

「いいです」

ルナとエリコが了承の返事する。

「じゃあ、そういう事で。で、二人ともこの後はどうする？まだ夜会は続くけどまだ遊ぶ？」

お腹もいっぱいだし、なんだか疲れてしまった絵里子は「あたしはもう休みたい」と返事をする。

「ルナは・・・帰るよね」

「当然だ」

「じゃあエリコは部屋に案内させるよ。僕はもう少しいなきやならないから」

そう言って近くにいたSPに案内役を呼びに行かせた。

程なくして、エリンの姿が見える。

「エリコ様どうぞこちらへ」

そう行って部屋の外に促す。

絵里子は二人にお礼を言って、自分の部屋へと戻っていった。

旅行二日目（前書き）

ちよつと更新開きました。ごめんなさい。なかなか思うように話が書けません。

旅行一日目

飛行船という物が想像できますか？

そう、あの大空をふわふわと舞う流線型大型風船みたいなやつです。で、その風船のお腹の所に小判ザメみたいに箱が付いていて、そこに人が乗れるの。んであたしは今そこに乗っています。

異世界的常識で移動は馬車か？それとも翼竜か？なんて予想していた絵里子は、予想に反したこの乗り物に、少しの落胆と、大きな安心で快適に移動時間を過ごしていた。

ただ、この風船部分に詰まっているのが、魔力だという若干意味不明な物に命を預けている所に不安はあるが、科学の力も絵里子にとっては相当魔法的存在なので、そこは考えないことにしている。

揺れも少なく快適に飛ぶその飛行船はゆっくりに見えても時速100キロは出ているらしい。

これに乗ってアランまでは城から約1時間。以外に早い到着だ。

先日の夜会での予定通り、昨日旅の準備を整え、今日の昼出発をした。そして当然その予定通り、目の前には今日も見えた目麗しく、また凛々しいお姿のルナさんが同行している。

本日のルナさんは、普段着ではなく騎士服。どうやらこの服は男性の正装用の服装のようだ。向こうで言えばスーツと同じカテゴリーなのだろう。

名目的には査察のルナさん。当然といえば当然の井出達だ。

「似合いますねその服」

何もしゃべらずただ進行方向だけを見つめているルナさんにあたしは話かけた。

「そうか」

そっけない口調で一見無表情なのだが、ほんの少しだけ顔が赤い。むふふ、照れてる。やっぱルナさんって可愛いかも！

29歳の男を可愛いと言うのもなんなのだが、どうやらルナさん誉められる事に慣れてないらしい。

昨日シャナに聞いてしまった。

こんなイケメンのくせに誉められる事に慣れてないなんて、ものすごく意外だ。

女の子にキャーキャー言われて、賛辞の言葉なんて言われ過ぎて何も感じないってな顔してるくせに。

それもやっぱりこの髪色のせいなんだろうか？

何度見ても綺麗だと思うその髪を見ながら絵里子は不思議に思っていた。

「アランに何かあるのか？」

考え事をしていた絵里子にルナが話しかける。

「え？」

聞いていなかった絵里子はもう一度問いかけるように首をかしげる。

「アランに行きたいと言ったのだろう？何か引がかかる事があるのか？」

そうだった。あたしには一昨日記憶喪失のオプションがついたんだった。

あっそうそう、シャナにはちゃんと記憶喪失の事を伝えて置いた。話が食い違っていると面倒だからね。

「ううん。ただ大きな湖のある素敵なりゾート地って聞いたから行ってみたかっただけ」

正直にそう答えるとルナは興味なさそうに「そうか」と短く返事をする。

でも絵里子にはわかっていた。

あんな無表情でも心配してくれてるんだって事が。

昨日も旅行の準備中に何か足りない物はないか？って言って顔を出してくれて（しかもケーキの手土産までもって！）「記憶喪失なら頭を打ったとか何かしらの外傷があるかもしれない。体調に変化はないか？王宮の医者には見て貰ったか？」って言って心配してくれていた。

絵里子は気軽に聞いた嘘を今更ながら後悔していた。

もし、あたしが嫁候補でしかも異世界人だと知ったらルナさんはどんな顔するんだろうか？

だましていた事を怒るだろうか？嫁にもらう気はないとあたしとの接触を避けるだろうか？異世界人なんて得体の知れない存在を気味悪く思うだろうか？

それはなんだか・・・嫌だ・・・。

相変わらず飛行船の進む先だけを見つめるルナの横顔見て絵里子は胸がキュとするのを感じた。

そしてその小さな痛みを誤魔化す様に、ルナ同様飛行船の進行方向だけを見つめた。

探索ついで

宿泊場所はメゾネットタイプのコテージが等間隔で並ぶ……のを見下ろすことが出来る高台にある屋敷。

そう、屋敷なのだ。これはもしかしてロイヤルスイートってやつですかね？

旅先で、そういう部屋もしくは棟を、見に行った事はあっても入ったことはなかった自分が、まさか入るだけではなく泊まる事になるうとは……。

「カメラ持ってくればよかった」

開け放たれた玄関で、目の前に広がる大きな玄関ホール&その奥に見える中庭を呆然と立ちつくし見つめる絵里子は、思わずそう呟いていた。

「何か忘れたのか？」

後から続いて来たルナが、絵里子を覗き込む。

「うっ、ううん。何でもない。あまりにも豪華な所だったからびっくりしただけ」

カメラなどという未知なる単語を呟いてしまった事を誤魔化すように笑う。

「そうか、何か必要な物があつたら言えればいい。用意させよう」

「いえいえ、本当十分揃えてもらいましたから」

絵里子は、宿泊施設の従業員らしき人々が次々と運んでいくトランクを横目で見ながらそう答える。

確かにこの部屋なら荷物いっぱい入るよね……。

昨日、モリアスとエリンがものすごい数のトランク的箱を積み上げてるのを見て「引越し？」と思ってしまったのを思い出す。

いや、薄々はわかっていたんだ、それが旅行の準備だと……だって部屋を移る理由が思い浮かばないし、部屋を移るのに一度トラン

クに入れるのも変だ。

だけど、その”あまりにも”な量に、もしかしたら最初に思った「引越し」が正しいのかもしれないと一応聞いてみたのだ。「これどーするの？」って。

すると何食わぬ顔で「旅行の支度をしています」と言われてやっばりか、と肩を落としてしまった。

「これ全部？」

「はい」

さらに、ものすごい笑顔で言われた。

「そっ、そう・・・」

「??」

きょとんとされ、なんだか量を減らせと言うのも面倒くさくなってしまう、「支度してくれてありがとう」とだけ言っておいた。

ぐらいの量が入る屋敷なのだ。

屋敷の構造はこうだ。

玄関を開けてまず大きな玄関ホール。そして右奥からカーブを描いて上へと続く階段。

上には寝室が3部屋それぞれ絵里子、ルナ、侍女二名、が一部屋づつ使用する。

一階には左からリビング、キッチン、客室二部屋と並んでいて、その二部屋は護衛の騎士5名が二人と三人に分かれて宿泊といった感じだ。

ちなみに、まだ見に行ったわけではないが、どうやら離れがあるみたい・・・玄関ホールから見える中庭の向こうにまだ建物が見える。どんだけ豪華なんだと思いつつも、とりあえず絵里子は割り振られた部屋に向かった。

先にモリアスとエリンが入り、荷物の整理をしてくれていた。

手伝うと言ったのだが丁寧にかつきっぱりと断られてしまった。

当然部屋に居づらい私は部屋の外に出る。

隣はルナさんの部屋か……。なんか部屋が隣だなんてちよつと照れる。

なんて思いながら、少し開いているドアを何気なく覗いてみた。

「！！」

いや、ルナさん！着替えるならドア閉めようよ！

この年で男の上半身裸、さらには後姿を見たからって顔赤らめてドアに隠れる。なんてベタな事はしたくない……。したくないんだけどね……。何せ男にあまり免疫ないんで……。

と言うかさ着替えるならなぜ騎士服で来た？！誰にも会わないんなら最初から普段着で来ればいいじゃん。

覗いた自分が悪いわけではなく、着替えているルナが悪いのだと悪態をついた後、とりあえずこの場は離れようとくるりと向きを変える。

向きを変える際、ふと窓の外に何か横切った気がしてキョロキョロとしてみるが、特に変わった物は見当たらない。

「見間違いかな？」

絵里子はそう思い、気にも留めずに次の目的場所、一階探索の為階段へと向かった。

着替えと持ってきたものの荷物の整理が終わり部屋の窓から外を覗くとエリコの姿を見つけた。

1人でふらふらと歩いている姿を見て、ルナは舌打ちをする。

「何で護衛が1人もいないんだ」

外へ出るのなら、当然付くはずの護衛が1人もいないことにルナは憤りを覚える。

しかし、護衛がいないのかもしれないと言えましょうがないのだ。だって絵里子が外へ出たとは誰も知らないのだから。

誰にも見つからず、外へと抜ける事ができたドア、それは本当に偶

然見つけたドアだった。

一階に下りて、一番最初に開けたドアが掃除用具入れだった。当然すぐに閉めようと思ったのだが、掃除用具入れの奥にも扉がある事に気づいて絵里子は好奇心で開けてみたのだ。開けた先は外へ続いていて、これまた好奇心でその扉から外に出てみようと思ってしまったのだ。

「外からも掃除用具が取り出せるようになってたんだ」

外へと出てからもう一度中を覗くと庭を掃除する道具も一緒にしまわれている事が分かり、納得する。

そしてそのまま絵里子はいでだからと外の散歩を楽しんでいたのだ。

裏庭での思い

どうやら建物の裏手に出たようだ。ここから湖は見えない。

それでも色濃い緑の中を散歩するのはとても気分がよかった。鳥の声と、木々のこすれる音がする。

もう少し奥の方まで見学してみようかと進路を変えようとした時、また眼の端で何かが動いた気がした。

「ん？何か大きな鳥とかいるのかな？」

二回目となるとさすがに見間違いではないだろうと、何かが見えた先をじっくりと見据える。と同時に後ろから「エリコ」と呼びかける声がし、体がビクっとなる。

振り返ると、焦った様子で走ってくるルナが見えた。

「なんだ、ルナさんか・・・どうしたんですか？」

「どうしたじゃないだろう！」

目の前に到着したルナさんは、絵里子を見下ろしながら、何やら怒った様子でこちらを見ている。

「こんな所で何をしている」

特に何か目的があった訳ではないので、それに答えるよりも、何で怒っているのかを絵里子は考えてしまった。

「？お手伝いしなかったのはやばりまずかったですか？」

片付けの手伝いもせず、1人でふらふらしていたのを怒られたのかと絵里子は肩をすくめる。

しかし、どうやらそんな事ではなかったらしい。

まだまだ怒り心頭のまま、ルナさんは厳しい表情を崩さない。

「そんな事じゃない！どうして護衛も付けずに1人で外を出歩いている！」

「え？護衛？・・・ここ敷地内だよね・・・」

建物のすぐ裏手を散歩しているだけなのだ、護衛が必要だなんて絵

里子にはとても思えない。というか、庭の散歩をするのに護衛を呼ぶ方が悪い気がしてしまう。

「外に出るときは誰でもいいから誰か1人は必ずつけろ」

「絶対？」

「絶対だ！」

その強い口調に、絵里子はこれは折れるしかない諦め「わかりました」と仕方なしにうつむいて呟いた。

絵里子のそのシュンとした様子に、若干胸が痛くなったルナ。

高ぶった怒りを、一度のため息で沈めると、絵里子の頭に手を置き、小さい子供にするようにクシャクシャと頭をなでる。

「最近この地方は人の出入りが多くなって犯罪が増えている。特にこういった大きな屋敷は狙われやすい。もしエリコに何かあった場合俺はシャナに殺される。頼むからあまりひとりにはならないでくれ」

さっきとは打って変わってやさしげな声だ。

絵里子は顔があげられない。

理由はわかっていただけだろう。

ルナさーん心配げな声で頭なでなでは心臓に悪いですよ！！顔が赤くなってしまっただうにもなりません。

しかもその手がなかなか離れてくれない。

嬉しいよ。胸キュンだよ。でもなんとなく子ども扱いされてる感が・

・

と、とりあえずこの甘辛い拷問から脱出しなくてはと、顔は伏せたまま一步下がる事にした。

手のぬくもりが頭からなくなる。・・・ちよつと寂しい？いやいやダメですそんな子供じゃないんだし！25歳だよ。

「わ、わかりました。今度からは絶対にひとりで外に出ません」
動揺を隠すように、はつきりとしたく口調で言ったが、少し早口になってしまったかもしれない。

一瞬間があつて「そうしてくれ。俺も目を離さないようにする」というルナの声が聞こえ、絵里子はようやく呼吸を整えることに専念する事ができた。

ルナは前を歩く絵里子を見ていた。

先程衝動的に触れた髪、自分の手はいつの間にかその髪の感触を楽しむように左右に揺れていた。

つるりとした髪が指の間に入り込みくすぐられる。ふわりと乱された髪が光に当たり、綺麗な茶色の髪がより色彩を強調する。

なんとなく離しがたくなってしまう、今度はその乱した髪を撫で付け綺麗に整える。また落ち着いた濃い茶色の髪に戻る。

触りすぎたか、エリコが身を引き、手が髪から離れると心の中で残念がる声をする。

もう少し触っていたいと思う自分に苦笑する。

俺にもそんな感情があつたのか。

小さい時から回りに疎まれて育った俺は、当然誰も愛せなかった。たとえ彼女という存在がいたとしても、それは形だけの存在。相手がこの髪でも「気にしない」というから付き合った。なのに結局はこの髪を理由に別れを告げる。いや・・・誰も愛せない俺に愛想を尽かし、その理由をこの髪の色にしたのかもしれない。最初から奇妙な男と付き合っていたかと思っただけなのかもしれない。どうでもよかった。

シヤナが国王になると決めたとき、俺もそれを手伝うと決めた時、面倒な存在はつくりたくないとした。どうせこの髪だ婚姻など出来る

はずもない。一生仕事に尽くせばいい。それくらいの価値はある仕事だ。

そう思っていたのに、たった数日前に出会った、どこの誰とも、少女なのか大人なのかわからない女が気になってしかたがないのだ。近づくシャナを疎ましく思うほどに。

こちらをまっすぐ見て「綺麗な髪だ」と言う。

表情をころころ変えて、「ルナさん」なんて誰も呼ばない敬称で呼ぶ。

そんな事がそんなに嬉しかったのか？自分でもバカバカしく思う。思うが、その女を、エリコを愛しいと感じてしまう自分はもうどうしようもないのだ。

いつか記憶が戻った時、君はそれでもこの髪を綺麗だと言ってくれるのだろうか？

楽しい？ディナー

むふふふ

顔が勝手に綻ぶのを感じながら、絵里子は念願の”湖畔のリゾート、ワンピースでお茶”を楽しんでいた。

場所はリビング前に広がる庭、のさらに先、崖から張り出すように作られたテラス部分で、お馴染みの生成りの白い生地でできた、可愛らしいワンピースで優雅なひと時を過ごしていた。

勿論お茶は自分で淹れたわけではないし、お茶のお供にお菓子なんかも添えられてる。

眼下に広がるエメラルド色の湖は、昼下がりの太陽（なのか？）に照らされてキラキラと輝き、風は水面を小さな波を作りながら足早に通り過ぎていく。

完璧だ！完璧だよシャナ！ありがとうシャナ！国王万歳！！

何もしない贅沢を楽しみながら、絵里子はただボーと湖を眺めていた。

背後には護衛の騎士が二人こちらをずっと監視しているが、気にしないでいればどうって事もない。何が起こるわけでもないだろうし。モリアスさんとエリンさんは晩御飯の準備をしている。

しかし準備といっても料理のほうではない。テーブルセッティングや配膳の準備だ。

なぜならこのロイヤルなお部屋、一流のシェフが部屋まで来てお料理をしてくれるらしいのです！もう本当に夢のようだね。

絶対にこの先死ぬまでこんな経験あるわけない！存分に楽しまないと。

ちなみにルナさんはお部屋でお仕事中です。宰相さんともなると、書類関係のお仕事も多いみたいです。大変だねー。

「お茶のお変わりいかがですか？」

いつの間にか隣にモリアスさんが立っていた。

どうやらお茶のお変わりを持ってきてくれたらしい。

「あっ、ありがとうございます。いただきます」

遠慮なくお変わりをついでもらう。

「すみません。なんか私ばかりのんびりさせてもらっちゃって・・・何か手伝うことがあったら言ってくださいね。簡単なことなら出来ますから」

勿論何度か同じような事は口に出している。

しかしこの後決まったように、こう返されるのだ。

「エリコ様に旅行中、快適に過ごしてもらうのが私たちの役目ですので、どうかお気になさらずお過ごし下さい」

みたいな事を、しかも笑顔で。

そしたら「すみません。ありがとうございます」としか言えないよね。

・・・だから、これだって、予想できはずなのだ。

よく考えれば当然のことだと思う。

ただ、実際そういう環境下で育っていないあたしにとっては、事前にこの状況を予想するのは難しい話だった。

夕食の準備が出来たと呼ばれて、リビング横、12人掛けのダイニングテーブルを見れば、用意されたテーブルウェアは二組。

向かい合わせて用意されたその片方の椅子をエリンさんが引いて待っている。

ここへ座れという事だろう。

とりあえず待っていてくれるのでそこに座る。

一礼してエリンさんは、今度は向いの席の後方で待機する。

「すまない、待たせた」

扉が開き、ルナさんが姿を見せ、こちらに向かってくる。

エリンさんが椅子を引き、ルナさんがその椅子に腰を下ろす。

エリンさんはまた一礼して、今度はキッチンの方へと行ってしまった。

やっぱりこれって・・・。

ルナさんと二人だけの食事って事だよね？

しかも向かい合わせで・・・。

ほら、同じ部屋にみんないるんだからさ、皆で一緒に食事すれば一気に片付くじゃない？

・・・どうして二人なのさ。

ものすごく照れるんですけど・・・。

だってこんな状況今まで一度もないんだもん。

高校生じゃ、学校帰りにファーストフード店に寄るとか、土日デートに行ってもせいぜい昼間の”街の洋食屋さん”程度。こんなゴージャスなお部屋で、キャンドルみたいなお洒落な照明が灯る中、向いあわせで、男の人と二人きりで食事なんて、想像くらいでしかした事がない！

なんとなく正面を見れないまま、この沈黙をどうしようかと考えていると、思いがけずルナから声かけられる。

「エリコは酒は飲めるか？」

「え？ あっはい」

唐突な質問に一瞬返答が遅れるが肯定の返事をする。

酒は好きだ。強くはないが。

「それなら少し飲まないか？」

そう言って近くで待機しているモリアスさんに目で合図する。
おおーそれで通じるのか。

程なくして、薄黄色の液体の入った小さめのグラスが運ばれてくる。
酒は飲めると返事をしたが、こちらの世界のお酒が飲めるかどうか・
・今頃気づいた。

「どうぞ」

コトンとテーブルに置かれた液体。

見た目的には少し色の濃い白ワインのような色だ。

ルナがグラスを手に取り、少しだけ舐めるように口に含む。

なんだかセクシー。

きつと距離が近いから、飲んだときの喉の動きとか、ぬれた唇とか
が見えてしまうからいけないんだな。うん。

ドギマギとしながらも、見よう見まねで、絵里子もそのウイスキー
のような飲み方を真似てグラスを傾ける。

匂いは少し果実の匂いがする。

口に入ると、強めのアルコールがブワッと鼻と喉を刺激する。が、
そのすぐ後に甘く芳醇な果実の味が鼻からすっと抜けていく。

・・・美味しい！もう少し爽やかな味だけど、例えるなら梅酒のよ
うな味わいだ。

「おいしいですねこれ」

絵里子がグラスに残る液体を見つめながらそう感想をもらせば

「アラン酒はその名の通り、この辺りの名産だからな。湖周辺の土
地ではなぜかニキトの実が甘く育つ。だからうまい酒が作れる。や
はり土地の物はその土地で食べるのが一番うまいな」

そう言ってルナはまた一口グラスを傾ける。

さすが宰相、さりげなく名産アピールだ。

ニキトの実がどんな物か絵里子はわからなかったが、やはり味からの連想で梅の実のような物を思い描がいた。

これもお土産で買いたいなあ。異世界からじゃ関税で持ち出し量に制限とかないだろうし、魔方阵で部屋まで送ってもらえるんだから、多少重くても問題ないしね。

あっそうそう、後は忘れちゃいけないトフラ細工の指輪！この辺りでも売ってるんだろうか？

「ルナさん。トフラ細工ってどの辺の工芸品なんですか？」

「ん？トフラ細工？トフラならアランの隣の自治区の工芸品だが？どうしてだ？」

「あまり高いのじゃなくていいんですけど、一つ欲しいなと思ってるんです。この辺りには売ってないんですか？」

「どうだろうか？トフラ細工は職人も減っているし、元々高級品だからな、あまりどこにでも売っているような物じゃない。まあ何日かここに滞在するなら一日くらいトフラに行ってもいいだろう。案内する」

そう言って微笑んでくれるが、自分のわがままの為に無理に時間を割いてもらうのは申し分けない。

「どうしてもじゃないんで、行けたらいいですよ」
そう一応ことわりを入れておく。

それに、高いなら買えないかもだし・・・。

絵里子は昨日シヤナから受け取った、こちらでのお金を思い出す。こちらのお金の感覚がまったくわからない絵里子にとって、受け取ったお金がどれくらいのもんなのかはわからなかったが、小さな布袋一つだった。そんなに多くはないだろう。

それに、もしその渡されたお金が十分であっても、そんなに高いものだったら買う訳にはいかない。一応あたしにも遠慮ってものがある・・・。

・・・いやどうだろう？どうせ10日間限定の世界だ、夢の中の出

来事だと割り切って豪遊しちゃうか？

うーんでも人の国とはいえ税金の無駄使いはよくないよなあ・・・でもここに泊まってこんなご飯食べてる時点でもう手遅れか？？うーん迷う。

「・・・リコ？・・・エリコ？」

「え？」

「どうした？もう酔ったのか？」

私利私欲の考えに落ち入りすぎて、どうやら視点が定まっていなかったようだ。

「あっ大丈夫です。ちょっと考え事してて」
慌ててそう返事をする。

「そうか・・・あまり飲みすぎるなよ・・・」

とルナは自分のグラスの液体を左右に揺らしながら、踊る液体の感触を楽しんでいるようだ。と、何を思ったのか、そのグラスをグッと握りなおすと、結構な量残っているそのお酒を、グッと一気に飲み干す。

「？」

一瞬眉をひそめるような顔をしたが、すぐにいつもの表情に戻って「甘くて飲みやすいが、結構アルコール度は強いからな」と、グラスをコトリとテーブルに置く。

今の行動の意味は全くわからなかったが、絵里子はとりあえず

「はっ、はい気をつけます」

と返事をした。

しかしその返事を聞いていたのかいないのか、ルナが「まあ」と言葉が続けるので、絵里子はなんだろうと？ルナを見つめたまま、続きの言葉を待っている。

と、急にゾクリとするような笑顔を浮かべ、ルナがこちらを見つめる。

そして「・・・まあ酔っても別にかまわないんだが」

と何だが意味深な言葉を、強烈な流し目つきで言い放った。

「!!!!!!」

ええっと・・・ルナさん？急にどうしたんですか？

なんとなく目が笑っていないんですけど・・・？

酔ってらっしゃるんですか・・・ね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1696s/>

観光大使

2011年6月13日08時18分発行